ポケダン～時を超えた遭遇～

アルビオン

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ポケダン～時を超えた遭遇～

【Ｎコード】
Ｎ５４９０Ｊ

【作者名】
アルビオン

【あらすじ】
記憶を失い自分の名前しか覚えていないピカチュウとギルドに入りたいがなかなか勇気を出せないワニノコが繰り広げていく大冒険。
二人が出会ったのは偶然なのかそれとも運命なのか・・・

プロローグ（前書き）

小説を書くのは初めてなのでどこか変な所もあるかもしれませんが、頑張っていきたいと思いますので宜しくお願いします。
あと、ゲームを元にしていますが、少しだけオリジナル要素を入れていきたいと思いますのでご了承下さい。

プロローグ

???「もうダメだ！手を離してくれ！」
???「何言ってるんだ！あともう少しだから頑張れ！」
???「この嵐じゃ、二人とも助からない。」
???「だからってこのままお前を見殺しには出来ない！」
???「早くもう片方の手を伸ばせ！」

言われたとおりもう片方の手を伸ばす。とその時
???「うわぁぁぁぁ。」
???「ダメだ。だんだん意識が薄れていく・・・。」

場所は変わって、トレジャータウンのギルドの前にて何やらそわそわしているポケモンがいた。
?????「ようし、今度こそ勇気を出さなきゃ」
そんなことを言いながらさっきからそこらを行ったり来たりしている。
そしてギルドに入ろうとする。

???「ポケモン発見！ポケモン発見！　誰のあしがた！誰のあしがた？
あしがたはワニノコ！あしがたはワニノコ！」

ワニノコ「うわっ！ビックリした！」
と毎回こんな感じである。
ワニノコ「はぁ、今日もダメそうだ。」
ワニノコ「この石を握っていれば勇気が出せると思ったんだけどなぁ。」
と言いながら石を取り出す。ワニノコにとって大事なものらしい。

ワニノコ「ほんと、オイラ情けないなぁ・・・。」
そう言いながら海岸へと向かう。

それを影からこっそり見ているポケモンがいた。
ドガース「おいズバット、今の見たか？」
ズバット「ああドガース。さっきのウロウロしていた奴、なにか持っていたが、
大事そうにしてるとこを見るとなんかのお宝かなにかか？」
ドガース「ああ、きっとそうに違いない。」
ズバット「狙うか？」
ドガース「おう！」

同時刻、海岸にてボロボロになって倒れているポケモン――ピカチュウがいた。
ピカチュウ「うぅ・・・。ココはどこなんだ？ダメだ意識が薄れていく・・・。」

ギルドに入りたがっているワニノコとボロボロになって倒れているピカチュウ
この二人はまだ知る由もなかった、これから巻き起こる数々の大冒険のことを・・・

プロローグ（後書き）

次回はワニノコとピカチュウが出会うお話です。

第1話　出会い（前書き）

今回は前にも予告したとおり主人公の登場です。

第1話　出会い

時刻は夕時、ワニノコは一人海岸に着いていた。
ワニノコ「わぁ。やっぱいつ見ても綺麗だなぁ。」
ワニノコが綺麗と言っているものとは、海岸にいるクラブ達が出している泡である。このクラブ達が出す泡が夕日、そして夕日の光り受け、オレンジ色に染まる海と重なる綺麗な光景のことだ。

ワニノコ「やっぱここにいると心が落ち着くや。」
と思っていたそんな時・・・・
ワニノコ「ん？」
波打ち際でなにやらあるものに目がいった。
ワニノコ「何だろアレ？」
ワニノコはすかさずその場所にいってみると・・・・なんと全身ボロボロのピカチュウが倒れていた。
ワニノコ「わわっ！ねぇ君、大丈夫？」
ワニノコはピカチュウの体を揺さぶり必死に起こそうとした。
ピカチュウ「うう・・・・。こ、ここは？」
ワニノコ「良かった！！気がついたみたいだね。ねぇそのボロボロの体、一体なにがあったんだい？」
ピカチュウ「えっと・・・・。う～んと・・・・。ダメだ何も思い出せない・・・・。」
ワニノコ「ええっ！！まさか記憶喪失！？」
ワニノコは驚きを隠せないでいた。

ワニノコ「で、でも何とか無事みたいだから良かったね、ピカチュウ。」
ピカチュウ「え？ピカチュウ？」
ピカチュウは何のことだか分からないでいた。

ワニノコ「君のことだよ。確かにここらじゃピカチュウはあまり見かけないけど、オイラだってそれくらいのことは分かるよ。」
ワニノコにそう言われると、すぐさま自分の体を確認し始めた。
体は全体が黄色い毛に覆われ、さきっぽが少し黒い耳、背中にある茶色い縞模様、ギザギザの尻尾、
そしてピカチュウのトレードマークである赤いほっぺた、確かにピカチュウになっていた。

ピカチュウ「う、嘘だろ・・・・。何で俺、ピカチュウになっちゃってるんだ？だって俺、人間なんだぞ。それがどうしてピカチュウに！？」
ピカチュウ自身何がどうなっているのか分からず、少し混乱気味になっていた。

ワニノコ「人間？だって君どこからどう見てもピカチュウにしか見えないよ？
なんか君さっきから変だよ。もしかして、オイラのことを騙して何かするつもり？」
ワニノコはピカチュウに対して疑いの眼差しで話し始めた。
ピカチュウ「だ、騙そうとなんてしてねぇし、何もしねぇよ！！」
ワニノコ「じゃあ、名前は何て言うの？」
ピカチュウ「名前？俺の名前は・・・・ボルト！！」
記憶喪失になっていたが何とか名前だけは覚えていた。

ワニノコ「ふーん、ボルトって言うんだ・・・・なんか面白い名前だね！！」
ボルト（お、おもしろ・・・・。）
ワニノコ「どうやら悪いポケモンじゃなさそうだね。さっきは疑ってゴメンね。
最近悪いポケモンとかが増えてるから・・・・。」

ボルト「ま、まぁ、分かってくれたんならいいや。」

ワニノコ「オイラの名前はシリウス。よろしくね。それより、どうしてこんなところにそんなボロボロの状態で打ち上げられてたんだろ？」

とボルトのことについて話している時だった。

ドンッ！！

シリウス「うわっ！？」

何かがシリウスにぶつかって、そのまま倒れてしまった。

そして、倒れた際にシリウスの懐から石が一つ転げ落ちた。

ぶつかってきた奴らがすかさずその石を拾う。

ズバット「なんだ、案外簡単だったなドガース。」

ドガース「そうだなズバット。ということでこの石は俺たちが拾ったんだから俺たちが貰っていくぜ。」

そう、ぶつかってきたのはズバットとドガースであった。

シリウス「あっ！！」

そう言ってシリウスは固まったまま何も出来ないでいた。

内心は石を取り返したい気持ちでいっぱいだがそんなこと出来るはずがなかった。

ズバット「なんだ、てっきり取り返しに来るつもりだと思ったが、そんなに震えてちゃ無理か。」

実際シリウスは足が震えて何も出来ない状態だった。

ドガース「ま、この石は俺たちが貰っておくから心配すんなって。」

ズバット「そう言う事だ、じゃあなビビリ君。」

そう言うとズバット達は奥の洞窟へと入っていった。

シリウス「ああ・・・・あの石はオイラの大事な宝物なんだ。だから取り返さなくちゃ！！ねぇボルト。あの石を取り返すのを手伝っ

てくれない？」
シリウスはボルトに必死の思いで頼んだ。
ボルト「ああ、もちろんだぜ。あんな事する奴らを見逃すわけにはいかないからな。」
シリウス「ありがとう、ボルト！！」
ボルト「そうと決まれば早速出発だ！！」

第1話　出会い（後書き）

ボルト：主人公のボルトだ、よろしくな！！

シリウス：パートナーのシリウスだよ、よろしくね！！

ボルト：それにしてもなんだこのストーリーは？まんまゲームに沿ってるじゃねぇかよ。

シリウス：それにストーリーの切り方も変だしね・・・。

作者：しょうがないだろ、小説書くのは初めてなんだから・・・。

シリウス：あとオリジナリティも加えるんだったよね？

作者：それも追々考えるよ。

ボルト：まあ、今回は最初だからってことで許してやるとするか。

作者：（なんでこいつはこんなにも上から目線なんだ・・・？）

ボルト：ん？何か言った？

作者：いや、なにも。まあ何はともあれ次回はギルド入門のお話です。

第2話　ギルド入門（前書き）

今回はギルド入門のお話です。

第2話　ギルド入門

ボルト達は洞窟の中を進んでいた。だが、シリウスは技を使うのに対して
ボルトは何故か技を使わず素手で戦っていた。

シリウス「ねぇ、ボルト。」
ボルト「ん？なんだ？」
シリウス「何でさっきから技を使わないの？」
シリウスは思い切って質問してみた。
ボルト「いや、なんで使わないの？と言うより使い方が分かんないんだよ・・・・。」
そう、ボルトが素手で戦っていた理由とは、技の使い方が分からなかったからである。
シリウス「じゃあ、少し技の練習でもしてみようよ！！ボルトは電気タイプだから、まず体の中にある電気を一点に集中させるようなイメージで電気を集めて、今度はそれを一気に放出させるイメージを描けばいいんじゃなかなぁ？」

ボルトは言われたとおりにやってみる。
ボルト「こうか？」
すると、ボルトの体から電気が流れ始めた。
ボルト「おりゃー！！」
その瞬間ボルトの体から電気ショックが放たれた。

シリウス「凄いやボルト、やったね！！」

ボルト「ま、まあな。」

ボルト（これが電気ショックか。ほんとに俺ポケモンになっちゃたんだな・・・・。それにしても何で人間からポケモンになっちまったんだ？）

ボルトは腕組みをしながらずっとそんな事を考えてた。そんなこんなでしばらく歩いていると、洞窟の最深部に着いた。
そこにはズバットとドガースがいた。
ボルト「やっと見つけたぜ！」
そう言われズバットとドガースはこっちの方を見た。
ドガース「誰かと思えばさっきのビビリ君じゃないか？」

ボルト「ビビリ？俺はビビリじゃねぇ！！」
とボルトは叫ぶ。

ズバット「まさかとは思うが、石を取り返しに来たってんじゃないだろうな？」

ボルト「取り返しに来たに決まってんだろ！！」
またも叫ぶボルト。しかし、ボルトの声を無視するかのようにドガースが言った。

ドガース「おい、ズバット。それはないって！！だって例え取り返しに来たとしても足が震えてるんじゃ何も出来やしねぇって。」
ズバット「そりゃあそうか！悪い事聞いちまったな。」

シリウス「ううっ・・・。」
そう言われるとシリウスは何も言えなかった。

そんなシリウスに対しボルトは・・・・

ボルト「おいおい、さっきから俺を無視して話を進めてるんじゃねぇよ！！」

どうやら自分を無視して話を進めてる事が気にくわなかったようだ。
ボルトの声にやっと反応したズバット達、だがその反応は？

ズバット「ん？お前誰だ？」
その瞬間ボルトの怒りは頂点に達した。
ボルト「さっきから散々無視しておいて初めての反応がそれかよ！！もう完全に怒った！！くらえ電気ショック！！」

そう言うとボルトはズバットに最大パワーで電気ショックを浴びせた。

ズバット「ギァァァァ～！！」
大きな叫び声を上げながらズバットは戦闘不能となった。

ドガース「ズバット！！よ、よくもやったな！くらえ、毒ガス！！」
ドガースの放った毒ガスはボルトに直撃した。
ドガース「やったぜ！！」
シリウス「ボルト！！」
ドガースはもちろん勝った気でいた。
その瞬間毒ガスの中から電気ショックが放たれドガースに命中した。

ボルト「こんな技で勝った気でいるからそうなるんだよ。俺はこのとおりピンピンしてるぜ！！」
ボルトは毒ガスをくらった割には元気だった。

ドガース「な、何で毒ガスをくらって全然平気なんだ・・・？」

ボルト「だって、所詮ガスなんだから息しないで吸わなければいい事だろ？さて、この石は返してもらうぜ。」

ドガース「ちっ、ここは一旦引くしかないな。」
ズバット「覚えてやがれ！！」
そう言うとズバット達は洞窟を出て行った。しばらくしてボルトたちも洞窟を出た。

シリウス「ボルト・・・。」
ボルト「ん？」
シリウス「ありがとうね。石を取り返してくれて。」
ボルト「まあ、俺もあいつらのことはは気にくわなかったからさ。石も取り返せたし良かったじゃん。」
少し照れたようにボルトは話した。

ボルト「そういえば、その石ってそんなに大切なものなのか？」
シリウス「うん。この石はね、ある日偶然見つけたものなんだけど、オイラはどこかにある遺跡の一部じゃないかなって思うんだ。ほらココ見て、不思議な模様があるでしょ。」
ボルト「確かに見たことない模様だな。」
シリウス「オイラはこの石の謎を解き明かすのが夢なんだ。だからいつも大切に持ってるんだ。」

シリウス「ねぇボルト。」
ボルト「何？」
シリウス「ボルトはこれからどうするの？」
ボルト「どうするって言ったって別に行くとこないし・・・。」
シリウス「もしよかったら、オイラと一緒に探検隊をやらない？」
ボルト「探検隊？」
シリウス「うん。困っているポケモンを助けたりするんだ。」

ボルト「探検隊か・・・・・・・・いいぜ!!」
シリウス「ほんと!!ありがとう!!」

そして二人はギルドの入り口に着いた。
シリウス「今度はボルトもいるから大丈夫。だから勇気を出さなくっちゃ。」
そう言うとシリウスは一歩前に出た。
???「ポケモン発見!!ポケモン発見!!誰のあしがた?誰のあしがた?
あしがたはワニノコ!!あしがたはワニノコ!!」
シリウス「ふぅ・・・。」
思わずため息を吐くシリウス。
とその時
????「おい!!もう一人いるだろ!!早くしろ!!」
どこからともなく声が聞こえる。
シリウス「多分、ボルトのことだよ。」
渋々ボルトは前へ出る。
???「ポケモン発見!!ぽけもん発見!!誰のあしがた?誰のあしがた?・・・・・・・・。」
少しの間沈黙が続いた。そして
???「あしがたは多分ピカチュウ、多分ピカチュウ!!」
????「多分ってなんだ、多分って?あしがたを見てポケモンを見分けるのがお前の仕事だろ!!ディグダ!!」
ディグダ「だって、あまり見ないあしがたなんだもん!!」
?????「まあ、確かにここらじゃピカチュウを見かけるのは珍しいからな。まあいい、そこの二人、入れ!!」
するとギルドの入り口の扉が開いた。そこには下へ行くハシゴがあった。

二人はハシゴを降りていく。そこに見慣れないポケモンが立ってい

た。
???「お前達か、さっき入って来たのは？」
このポケモンはペラップ。おしゃべりが得意なポケモンだ。
シリウス「あの、オイラ達・・・。」
ペラップ「ああ、セールスとかはお断りだよ。」
シリウス「いや、そうじゃなくって、オイラ達ギルドに入りたくって来たんだけど・・・。」
ペラップ「え？ギルドに入りたい？なんだそんなことなら早く言っておくれよ。まずは手続きをしないとな。ついておいで！！」

二人はペラップについて行くとある部屋の前で止まった。
ペラップ「この部屋はここのギルドの親方様の部屋だ。
くれぐれも失礼のないようにな。」
ペラップはそう言うと部屋の扉を開けた。
ペラップ「親方様。ギルド志願者を連れてきました。」
ペラップの言う親方様とは風船ポケモンのプクリンだった。
プクリン「やあ、君達がギルド志願者だね。君達の名前は？」
シリウス「オイラ、シリウス。」
ボルト「俺はボルトだ。」

プクリン「オッケー、今日から君達はプクリンのギルドの一員だよ！！」
そう言うとプクリンはシリウスにカバンを渡した。
中には探検隊バッジや地図などいろいろな物がが入っていた。
シリウス「ありがとうプクリン！！」
プクリン「あと君達のチーム名は？」
シリウス「チーム名？そんなの決めてなかったな。」
ボルト「じゃあ、チームB・Sってのはどうだ？」
プクリン「チームB・S・・・うん、いい名前だね！！じゃあチームB・S、明日から頑張ってね！！」

シ・ボ「おー！！」
二人は元気よく返事をした。
ここから二人の大冒険は始まるのであった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5490j/

ポケダン～時を超えた遭遇～

2011年10月6日10時45分発行